

# めがね

津守 真

その子は、朝、学校にいくと、私の机の上から眼鏡をとり、若い男の先生にかけさせて一緒に遊ぶのが常である。昨年の秋亡くなったその子の父親も眼鏡をかけていた。

その日、十二時過ぎに出かけねばならなかったので、その先生から眼鏡を返してもらった。しかしその子は承知せず、すっかり支度した私のところにそれを取りにきた。私は眼鏡を必要と思うたので、他の先生の眼鏡と代えてもらおうとした。ひとつは銀色の縁であり、もうひとつは玉の形が私のと違っていた。私のは黒い縁である。それではどうしてもだめだと、その子は、めったに出さない大きな声を出した。

そのとき、講演に出かけようとしていた私に、ひとりの職員が、「めがねをかけなければならぬようなことは、話す必要はないでしょう」と声をかけた。その一言で私の心が決まり、私は眼鏡をその子に渡し、これでよかったのだと思った。

この日、私には眼鏡を返してもらおう立派な理由をいくつも数えることはできたし、たと

え子どもが承知しないままに出かけたとしても、だれからも何も言われなかったと思う。けれども、子どもだけは、私に不信感を残したろう。そして、その点が子どもと私との間で決定的である。歩きながら、私は、同じようなことがいままでに何度もあったような気がして、それはいつだったかといろいろ考えた。

私の子どもがまだ二、三歳だったころ、どうしてもこうすると言い張って困らされたことが何度もあった。大人の側には、子どもを従わせる理由は、いくらでもあるのだが、そうしたら子どもとの間を頑なにするように思え、そう思ったとき、一方的に強行せずに、一緒にやってゆけるやり方を探した。他人からみたら、それは甘やかしているように見えたりもした。また私自身も、それで将来困ることは生じないだろうかなど、不安がなかったわけではない。しかしそれから二十年以上たってみると、あのとき心配したようなことは何も起こっていない。それぞれのときに、子どもと信頼し合い、納得しあって過ごした、それでよかったのだと思う。

その後、幼稚園でも、養護学校でも、似たような状況に何度も遭遇した。そのたびに、私は周囲の人たちに助けられながら、ようやく自分の心を立て直し、子どもを信頼することを第一に考えられるようになったことが何度もあった。こうして後になって考えると、子どもがどうしても主張することには、子どもなりの理由があるように思える。そのときには、大人の側のあまりにも立派な理由のために、あるいは他人からの批判や、根拠のない将来の不安の故に、子どもにとっての内的意味が見えなくなっている。

めがねに話をもどそう。

子どもは黒い縁の眼鏡を欲しがった。父親の眼鏡がそれに似ていたのかもしれない。最初はそれが理由だったかもしれないが、それが私の眼鏡であることも次第に意味をもってきたように思われる。何か月か以前に、彼は私に眼鏡をかけさせて、校長室のソファでゆっくりと過ごした日があった。その後、若い男の先生に私の眼鏡をかけさせて遊ぶようになった。父親の似姿をそこに見、その上に、私の存在をも重ね合わせて、学校に対する安定感を感じたのかもしれない。そう考えると、私の眼鏡でなければだめだと言いつ張ったことは、私の眼を傍に留めておきたいという主張とも言える。そうしたら、私にとっての名誉なことである。こんな考えは当たっていないかもしれない。しかし、他のどんな理由をも差しおいて、この子どもに対する信頼感を維持しつづけることを優先させたことは間違っていないかと思う。

〇めがねについてのベッテルハイムの対話

ブルーノ・ベッテルハイムは、その著書「A Home For The Heart」(1974)の中で、眼鏡についての実習生との対話を語っている。

ソフィ(実習生)「先週、アイダが来て、『あなたは新しい眼鏡をかけていますね。』と言いました。私の眼鏡は新しくありませんでした。」

ベッテルハイム「彼女がそう言ったのだから、あなたは新しい眼鏡をかけていたのでしょう。」

ソフィ「私は『いいえ、アイダ、私は新しいめがねをかけてはいませんよ、私は休暇でしばらく留守をしていたんです。』と言いました。そうしたら彼女は笑って、歩き去っていききました。……この子どもたちは、留守をしていた人と接触したいのだと思います。」

ベッテルハイム「患者の言うことは常に正しいと私はいつも言ってきたでしょう。患者の言うこと、することには理由があり、われわれにはそれが分らなくとも彼はそれを知っています……。」こう言って、ベッテルハイムは、子どもの側の内的理由に目を向けることの必要をのべる。実習生のソフィに、アイダが、「あなたは新しいめがねをかけていますね。」と言ったとき、この子どもは自分の内面的変化を打ち明けたのだというように状況を理解したら、事態は違つたように展開しただろう。それなのにソフィは「いいえ、アイダ、私は新しいめがねをかけてはいませんよ。」と言つて、アイダの言ったことの内的意味をも否定したことになった。そして、アイダがわざわざこれを言ってきたのは、休暇で留守をしていた人と接触したいのだとの常識的な解釈にとどまつてしまった。

この実習生は、おそらく、アイダと深く交わってきたのではないと思われる。ベッテルハイムは、これまでの経過をアイダと一緒に生きた者にとつては、アイダには内的変化が起りつつあり、いまやすべての眼鏡がこれまでとは違つたように見えてきていると述べ、次のようなことを付け加えている。

以前に、アイダは、他人が眼鏡をかけていると、とびかかってそれを取り、こわしたという。アイダの母親は極度の近視であった。アイダは母親が怒って激昂したとき、自分を見ることができないように、眼鏡をとってこわした。眼鏡はアイダにとって危険な魔力を代表するものであり、彼女は自分もそのような力をもちたいと思って、眼鏡をかけたが何も新しい力は得られなかったので、次々に眼鏡を破壊したのであった。ベッテルハイムの学校の職員たちは、眼鏡の危険な魔力から自分の身を守ろうとするアイダの努力に、共感し、協力しようとした。そして彼女はもはや、眼鏡に内在する力を必要としなくなった。「彼女の眼鏡に対する態度は変化した。いまやすべの眼鏡は『新しいめがね』になったのである。」

ここまで考えてくると、「あなたは新しいめがねをかけていますね。」とのアイダのことばに対して、ソフィが「あら、そう？」とうなずいたら、「めがねなんかもうこわくない。」とアイダは答えたかもしれない。「それはあなたにとって困惑する答えだったかもしれないが、そこに問題の核心があることが、直ちにわかったでしょう。」とベッテルハイムはいう。「新しいめがね」ということばの背後にかくされている内的意味を理解することができないままに過ぎたら、子どもは自分の問題を他人に分ってもらおうとして、もっと極端な行動を示すようになるかもしれない。そしてだれも理解してくれないと思うと、遂には、世界との接触から身をひくようになる。

つまり、人と人との間のコミュニケーションの障害が、子どもの問題を生み、また大き

くするとの考えがここにある。

私の眼鏡でなければいやだと子どもが言い張ったとき、私は何故すぐに子どもにそれを渡してやらなかったのだろうか。その日に眼鏡がどうしても必要だったわけではないのに、私は必要だと思ったのだった。大人はこうして自分のまわりに必要の網を張りめぐらして、もっとさし迫った子どもを見えなくしているようだ。それは新たな状況に直面するたびに、何度でも破らなければならないほどに大人の存在にしみこんでいる。

この子どもにとって、眼鏡がどのような内的意味をもっているかは、まだ明瞭でない。それは、ただ父親の眼鏡に似ているというような常識的な説明ではすまないように思われる。これから互いに信頼する関係をつくり上げながら考えてゆく課題である。

(愛育養護学校)

